

発熱・頭痛・頸部痛を主訴に来院した 83 歳女性の Crowned dens syndrome の一例

与論徳洲会病院

氏川智皓、池間迪子、寺田立人、高杉香志也、久志安範

【緒言】

Crowned dens syndrome は高齢者の急性発症の頸部痛・発熱の症例において重要な鑑別疾患の一つである。環軸関節の歯突起周囲にピロリン酸カルシウムなどが沈着することによる生じるいわゆる頸椎の偽痛風と考えられており、診断は頸椎 CT 検査によって診断を行う。今回、発熱・頭痛・頸部痛を主訴に来院し、頸椎 CT 検査にて診断された Crowned dens syndrome の一例を経験したので報告する。

【症例】

83 歳 ADL 完全自立の女性。発熱・頭痛・頸部痛を主訴に当院受診した。血液検査にて白血球上昇、CRP 上昇を認めたが各種検査にて熱源は明らかにならず、精査加療目的にて当院入院となった。

入院後、頸椎 CT 検査にて環軸関節周囲の石灰化を認めたことから、Crowned dens syndrome の診断に至った。

入院後翌日には頭痛消失、2 日目には解熱し食事全量摂取するようになり、3 日目には炎症反応改善傾向を認めた。その後発熱・頭痛・頸部痛いずれの再発も認めず、炎症反応上昇もみられなかった。

【結語】

急性発症の発熱・頭痛・頸部痛を主訴とした Crowned dens syndrome の一例を経験した。偽痛風は高齢者において頻度の多い疾患であり、高齢者の急性の発熱・頭痛・頸部痛においては髄膜炎、化膿性脊椎炎などの緊急疾患、頻度の高い細菌感染症を除外した上で鑑別診断に入れねばならない疾患である。炎症反応上昇がみられ、血液検査のみでは細菌感染症との区別は付かないため、熱源が明らかでない場合には頸椎 CT も施行することが重要である。